

60

〈創刊60号記念〉

平成25年10月5日

明珠



徒容録に学ぶ

第六十則

鐵磨牛

(五二)

〔示衆〕

衆に示して云く、鼻孔昂藏り、各おの丈夫な相を具わり、脚跟も牢実せば、肯て老婆な禪を学ばん。無巴鼻き機関を透得らば、始て正しき作家の手段を見ん。且道れ、誰か是れ其んな人ぞと。

〔本則〕

挙ぐ。劉鉄磨、鴻山に至る。(相見はすでに了れり)。山云く、「老牛、汝来るや?」(蜂を掠り、蝎を剔る)。磨云く、「来日、台山の大會齋なり。和尚は還、去くや?」(氣毒い烟火の然ゆるがごとし)。山、身放臥う(半路にて身を抽く)。磨、便ち出で去く。(一擇えると便ち転えす。)

頌に云く、「百戦の功成つて太平に老り。(家を安んじ、業を楽しむ)。優柔、誰か肯えて若ろに衡を争わん。(饒人、是れ痴ならず)。玉鞭金馬、閑かに日を終る。(ありと雖も、なきがごとし)。明月清風、一生を富ます。」(受用不尽だ。)

き、大叢林を形成。集まつた雲水は一千余人と伝えられ、多くの逸材を打出し、九七歳で遷化。法嗣は多士済々ですが、特に仰山慧寂の系統は鴻仰宗と呼ばれ、禪宗五派の一つを形成し、一五〇年ほど栄えました。禪風は、峻烈なはたらきを特色とします。

一方、劉鉄磨はくわしいことは不明。劉氏の生まれで鉄磨が僧名。鴻山のもとで大事を決着し、法嗣となります。鴻山道場から五キロほどの所に小庵を結び、そちこちの禪道場を訪ね、盛んに問答商量をしていたという女傑。機鋒が鋭かつたので、俗姓をかぶせた「劉鉄磨」として知られます。

このように、峻烈なはたらきの宗師家と、その弟子ながら機峰の鋭い老尼傑との対決。さぞかし火花を散らすかと思いきや、なんと百戦の功成つた者同士は静かに自在な心境が

本誌第六〇号に因んで、『徒容録』第六〇則を拝読します。この則は、小釈迦といわれ、ふつうは鴻山と呼ばれる靈祐禪師と、片や鉄磨というスゴい名の老尼僧さんとの、絶妙な遊戯三昧の機縁。ただ、絶妙すぎて「本則」が短いので、宏智さんの「頌」も採用しました。

鴻山靈祐(七七一~八五三)は、福建省福州の出身。かの有名な百丈懷海禪師に参じて法を嗣ぎます。ですから、黃檗さんとは同門ですね。のち、湖南省の大鴻山に同慶寺を開



鴻山

発揮されることを、思い知らされる一則です。

まず「示衆」の大意。「身心ともにそなわり、基盤が確立している禅者には、もう老婆禪も無用。難関を透って正眼をそなえたら、正しきやり手の指導者だ。こんな人は誰か?」

こんなところ。その人物こそは鴻山・鉄磨の両者を指しているとみてよいでしょう。そこで、本元の「本則」をみます。

鉄磨尼が鴻山のところに来た。鴻山「おいぼれのメス牛が來たな」「明日の五台山大斎には行きます?」鴻山がパッと身を伏せるや、老尼もスタスター出て行つた。

分かりませんね、たつたこれだけでは。そうです。鉄磨は鴻山の法嗣ですから、両者は互いに手のうちを知りつくしています。だから鉄磨が来た時、鴻山はおいぼれメス牛と、これは親しみの愛語。鴻山自身「水牯牛」と自称しているのです。万松さんのコメントでは、この鴻山の語を、蜂・蝎のような危険千萬なものを完璧に処理した、とのほめ言葉。「来たか」は真に来たのは何者が、の意味。対する老尼もさる者、明日の五台斎会に行くか、と逆襲です。五台山は山西省の名山で、湖南からは何一〇日の距離。つまり、「来」に対する「去」で、二見にわたるか否かのギ

リギリの反問なのです。すると鴻山はゴロリと寝て牛になり、二見を超えたすがたを示した。見た老尼がサッと出て行つたのは、同じく二見を超えた本分世界のままによる無心の動静、といわれています。

こんな両者の機縁を讃歎したのが宏智の「頌」で、それをまた万松がコメントしますが、これまたほめ言葉。ただし、両者ともべたほめではあります。

〔太平安〕
なる悟り
の心境は、
自然にも
たらされ
けつして
りや、と反省することですね。

それにしても、今夏は何と暑い天地だったことか。そして、その猛暑から多くのことを身をもつて学んだことか。やはり天地は先生です。

やボンノ
ウとの必

◎『従容録』の構成

- ①宋代の宏智正覚（一一五七寂）が昔の古則一〇〇を選び、その一々に偈頌（詩）を付けた作品が「宏智頌古」。②金代の万松行秀（一二四六寂）が、その一々に示衆（大意）・評唱（批評）・著語（語釈）を付けた作品が「従容録」。



大鴻山の遠望

無心の所作がちゃんと法に契っています。

ボンノウまみれで自我の強い私など、こう

いう公案をみると、とても高尚で次元の違う世界という感に打されます。ですから、日常は坐禅も作務も修行だなどといつても、それらが「自己をはこびて万法を証」そうとしているからダメなのであって、「万法すすみて自己を証」する世界に没入しなければならないのでしよう。それには、迷いと悟りを両極と考えずに、ボンノウまみれの中にもフットと無心になれる時がある。それが少しづつ増えてきたぞ、また、このすばらしい天地の世界につつまれながら、いつたい何の不平不満あります。

ボンノウまみれで自我の強い私など、こういう公案をみると、とても高尚で次元の違う世界という感に打されます。ですから、日常は坐禅も作務も修行だなどといつても、それらが「自己をはこびて万法を証」そうとしているからダメなのであって、「万法すすみて自己を証」する世界に没入しなければならないのでしよう。それには、迷いと悟りを両極と考えずに、ボンノウまみれの中にもフットと無心になれる時がある。それが少しづつ増えてきたぞ、また、このすばらしい天地の世界につつまれながら、いつたい何の不平不満あります。

坐禅堂開單式 — 修行道場の誕生を慶ぶ —

三月二十四日（日）午前一〇時より坐禅堂開單式が催され、九三名の方がご参加ください、盛況裏に円成しました。

前日の午後に建設委員のみならず会員有志も集まり、式典会場となる本堂の飾り付けや椅子の設置、坐禅堂の掃除、宴会場となる大悲殿の会場設営、参加者へお渡しする記念品



坐して開單式を待つ道友

などの袋詰め作業などをを行い、準備も万端整い、当日は無事開單式を迎えることができました。

山門には国旗と仏旗が掲げられ、参加者がその下をくぐって続々と境内に入つてこられました。九時五〇分に参禅会員の内、在家得意度を受けている二六名が坐禅堂に入堂し、各々の安名が記載された单牌の掛つた單に坐り、西堂老師と椎名老師の入堂を待ちます。

坐禅堂と法堂との巡版が交互に打たれ、その後に僧堂鐘が七声打たれ、西堂老師とご老師が入堂され、焼香三拜されましたが、我々は面壁しているのでその様子を拝見することが出来ません。

しばらくして維那念誦が唱えられ、続いて十仏名を大衆一同でお唱えしました。十仏名の諷誦が終わるとご老師が検單に廻られ、止靜が打たれ西堂老師より口宣が始まりました。開單式で西堂老師をお勧めいただくのは、八千代市の米本山長福寺の東堂であられる吉村武雄老師です。



開單式祝宴で披露された偈

吉村老師は口宣の中で、長福寺さんの坐禅堂開單式の際、当時の永平寺貫首秦慧玉禪師様からいただいた七言絶句の偈頌

半途始得本真金 (半途にして始めて得し本

より真金)

全路無辞惜寸陰 (全路辭すること無く寸陰

を惜しむ)

只管隨縁修証去 (只管縁に隨い修証し去けば)

通身脱落打安心 (通身脱落して安心を打す) を示され、その偈をそつくりそのまま椎名老

師に謹呈しますとのお言葉がありました。

因みに、この七言絶句の偈に対し、**小畠**

節朗代表幹事さんが次韻の作法により、次のように七言絶句の漢詩を作られました。

正身唯務現黄金（正身唯だ務むれば黄金現

われ）

端坐承当惜寸陰（端坐承当して寸陰を惜し

む）

何幸児孫参此会（何の幸いぞ児孫此の会に

參ず）

共成修証一如心（共に成す修証一如の心）



参禪道場認可の看板を受ける椎名老師

因みに開單式の祝宴の席では、小畠さんが

右記の二句についてご説明され、小山齋さん

が朗々と吟じられました。

吉村老師は最後に、『參同契』の「謹白參

玄人。光陰莫虛度』を引かれて、口宣を結ばれました。我々参禪会員は肝に銘じなければ

ならない語句だと思います。

本堂に移り、梅花講の方の御詠歌で仏祖諈経が始まりました。椎名老師が香語を述べられ、献茶湯が行われ、般若心経を一巻全員で諈誦した後、西堂老師より次のようない下垂示を行きました。

「人間は立場が違うとモノの受け止め方が違ってきます。例えば世間の人は僧侶が住職を退くと、楽隱居のように何もしなくなると思つておられるが、そうではない。僧侶は住職を退き東堂となつても、朝課と晩課を欠かさず行うのです。それが僧侶の勤めなのです。そのあたりが世間の人と出家者との違いなのです。立場によつて受け止め方が違う場合がありますが、私はお釈迦様ならどういう風に対処されるかを常に考えて、判断することにしています。」と垂示を結ばれました。佛教者として、我々も仏道に照らして行動しなければならないと自誠した次第です。

引続き本堂で式典が行われ、まず小畠建設委員長から椎名老師へ**坐禅堂の寄進状**が奉呈されました。その後、吉村老師は、心の底から

「有難うございました」と大きな声で感謝のお言葉を述べられました。

さらに曹洞宗管長から龍泉院に對して**参禪道場認可**が交付され、その看板が**大島教区長**

様から椎名老師に渡されました。また、坐禅堂建立にあたつて功績のあつた参禪会員等へ、**管長表彰**が大島教区長様から渡されました。

続いて椎名老師からは、坐禅堂の設計・施工にあたられた工匠堂の**渡辺社長**、また坐禅堂の前の石畳の歩行路や基壇の葛石、及び階段の石材をご寄進された濱島石材店の**濱島社長**へ、感謝状が贈られました。

さらに巨額な金額のご寄進のみならず、坐禅堂の額や聯などの仏具多数をご寄進され、また建設委員会の委員長として今回の大事業を無事円成に導かれた**小畠建設委員長**の功績に対し、ご老師から感謝状が贈られました。

この後、**刑部会計担当**からの会計報告、小畠建設委員長からのご挨拶、椎名老師からの謝辞がありました。ご老師の謝辞によれば、龍泉院が創立されてから今年で七六〇年になりますが、創立から三八〇年後の寛永九年にな



ご老師から感謝状が小畠さんへ贈呈

を惜しまない。

二、当参禅会のようなサンガの団体が、今後の仏教教団や寺院の在り方の中で、どのような力を發揮でき、どのような意味を持つのかについて、学問的に纏めて公表し、多くの人に訴え、反響を呼び込み、批判を仰ぎたい

という念願を述べられました。ご老師の篤き想いに我々一同心を打たれた次第です。

坐禅堂の前で記念の集合写真を撮った後、大悲殿に移って松井さんの司会による祝宴が催され、美味しいご馳走やお赤飯をいただきながら歓談している内に余興が始まりました。

最初に、秦慧玉禪師様が長福寺さまの坐禅堂建立に際して贈られた七言絶句の頌と、この詩に対しても小畠さんが次韻された漢詩が、小畠さんからご披露されました。なおこの二つの漢詩を牧野さんが大きな紙に揮毫され、来賓席の後ろに掛けられていました。ご披露された二つの漢詩を小山さんが朗々と吟じられ、開單式にふさわしく格調の高い祝宴になりました。

ご老師は謝辞の中で今後の抱負として次の二点をあげられました。

一、この坐禅堂で、一人でも多くの人が東洋の生んだ最大・最高の精神文化である坐禅をあじわっていただき、心を安らかになつていただきたい。そのためには身命



朗々と吟ずる小山さん

開單式顛末記

建設委員会・書記 杉浦 上太郎

去る三月二十四日、「開單式」が行われましたのは、まだ記憶に新しいところであります。

「開單式」という耳慣れない言葉は、平成二四年九月に実施された第二七回建設委員会にて、初めて耳にしました。

その席上、椎名老師より、「開單式」の意義が示され、また、一一月の第二九回建設委員会にて差定等が示されました。

【 意 義 】

- 一、坐禅堂の開き初め
- 二、けじめをつける

【 差 定 】

- 一、坐禅堂開單

り合わせでしよう。

ご老師は謝辞の中で今後の抱負として次の二点をあげられました。

一、この坐禅堂で、一人でも多くの人が東洋の生んだ最大・最高の精神文化である坐禅をあじわっていただき、心を安らかになつていただきたい。そのためには身命

などがあり、最後に中島さんの三本締めで、祝宴はめでたくお開きとなりました。

小山さんの詩吟の後、「花は咲く」の合掌

などがあり、最後に中島さんの三本締めで、祝宴はめでたくお開きとなりました。

二、仏祖諷経

三、式典

四、祝宴

また、招待者名簿の作成、記念品の決定、堂内仦具の整備などの検討も要請されました。

「開單式」の役務も当然ながら、建設委員会がその任を果たすことになります。実施要項の作成は小生が担当することになりました。

実施要項は、いわゆる企画書のようなもの。作成上で心掛けたことは、左記の三点です。

一、分りやすいこと

二、役割分担を明確にすること

三、参加者に失礼にならないこと

実施要項は、差定の流れを明瞭化するため、図示を中心としました。役割分担の人選は、

小畠委員長の指導のもとに決めました。総責任者は、小畠委員長、坐禪堂での世話役は五十嵐副委員長、式典の司会は小生、祝宴の司会は松井委員、その他全委員を配役いたしました。

「開單式」の準備作業は次の通りです。

一、長福寺吉村老師へ西堂依頼状郵送

二、随喜の御寺院への案内状郵送

三、招待状（返信葉書入り）の名簿整備・

宛名書き・郵送

四、マスコミへの取材案内書作成・郵送

五、対象別記念品の検討・発注

六、仦具の整備／簾、坐禅牌、魚鼓、僧堂湯器など

七、祝宴の準備／指定席の配列、料理の吟味・発注、飲み物の検討・発注、式次第プランなど

八、記念写真／写真館の手配、撮影場所の前日準備／坐禅堂内の「單牌」取り付け、本堂設営、大悲殿設営など

九、前日準備／坐禅堂内の「單牌」取り付け、本堂設営、大悲殿設営など

十、開單式の出席者は総勢九三名。 *一・二・は、椎名老師手配 いよいよ、緊張の当日です。

開單式の出席者

・来賓 二名 ・御寺院 九名

・会員 四四名 ・一般 一〇名

・檀家 二六名 ・報道 二名

坐禅された会員は二六名。すべての行事は、

厳肅な雰囲気の中、滞りなく進行し無事円成

いたしました。

記念写真撮影の後、「祝宴」となりました。

八〇余名の参加を得、松井さんの司会で和やかな雰囲気のうちに進行。重鎮の祝辞を頂戴した後、メインイベントともいうべき、小山

さんの詩吟で最高潮に達しました。

続いて、建設委員会選抜余興チーム（相澤

委員、刑部委員、杉浦委員）と龍泉院大黒様による「歌声喫茶」タイムとなり、「青い山脈」「花」「誰か故郷を想わざる」「花は咲

く」「曹洞宗歌」を全員で合唱。刑部委員のオカリナ演奏「早春賦」、杉浦委員のギター伴奏も興を添えた（？）と自負しています。

椎名老師のもとに建設委員等が、和合力を發揮した結果の「大円成」だと思つ次第です。



全員で「花は咲く」を合唱

坐禅堂での最初の一夜接心

梅雨の中休みで晴天に恵まれた六月八日（土）、九日（日）の二日間にわたって一夜接心が行われました。今年の一晩接心は新しく建立された坐禅堂での初めての一晩接心となり、坐禅を行う場所が本堂から坐禅堂に移つただけでなく、差定も坐禅堂の威儀を中心にな一部変更となりました。

これまでの差定と異なる点は、二日目の一



一夜接心に参加した会員諸氏

炷目と二炷目との間の行茶を坐禅堂でいただく事になった点と、朝のお勤めも坐禅堂で行い、これまで『般若心経』をお唱えしていますが、『祇園正儀』に変わりました。

午後二時五〇分から第一炷目の坐禅が始まりました。ホトトギスやカツコウの鳴き声が逆に静寂さを醸し出すなか、ご老師の「口宣」をお聞きしながら、これから七炷坐り切るぞと渾心の坐禅を努めるうちに、四〇分の坐禅はアツという間に終わってしまいました。

次いで禪講となりましたが、昨年から引き続き瑩山禪師が撰述された『坐禅用心記』についてのご提唱をいただきました。今年の『坐禅用心記』のご提唱の中にも素晴らしいお言葉が続々と出てまいりました。例えば、「常に大慈大悲に住して、坐禅無量の功德、一切衆生に向せよ。」

「誓つて煩惱を断じ、誓つて菩提を証せんと念わば、只管打坐して一切不為なる、是れ坐禅の要術なり。」

などです。さらに厳しく

「橋慢我慢法慢を生ずること莫れ」と諷めのお言葉もありました。

この点に関してご老師から、橋慢とは他人と比べて自分が優れていると思うところから

生ずるので、自我を無くして平等の地平に立つようにしなければ橋慢は無くならない。また、自分は坐禅をしているから他人と違うのが法慢であるとのご指摘がありました。このお言葉がグサッと心に突き刺さったのは、私一人ではなかつたと思いますが・・・

二日目の坐禅堂での朝課の後に作務が行われました。作務は坐禅堂と大悲殿と境内の三ヶ所にわかつての掃除です。私と刑部さんは大悲殿のトイレ掃除を行いました。例年は功德絶大のトイレ掃除は永野さんが担当されていましたが、今年は永野さんがご欠席なので、この功德絶大なトイレ掃除を一人で担当させて頂くことに致しました。

トイレの便器や床のタイルを雑巾で拭くのは初めての経験でしたが、無心になつて雑巾で便器を磨いているうちに、便器もただの家具の一つだという具合に思えるようになつてきました。掃除が終わりトイレを眺めると大変すがすがしい気分に浸れましたが、これがトイレ掃除の功德のひとつなのでしょう。

今年も松井・小山両典座さんによる心づくしのお食事や、今泉さんのお手前によるお抹茶を頂き、七炷の坐禅もアツという間に終わ

りましたが、坐禅堂で行つた今年の一夜接心は例年とはやはり一味違うものでした。

坐禅と囲碁

我孫子市 刑部 一郎

これまで七回、一夜接心に参加しているが、ただひたすら（只管）坐ることのみと考え参加していた。今回は新しい坐禅堂での初めての一夜接心であり、心構えを定めて臨みたいと思った。為坐禅はダメだとご老師から教えられて分かっているので、何かを目的にして坐るというより、坐禅にて煩惱を追つかげず、無我の境地が深まれば、心の中にある欲を、少しでも手放すことができるのではないかと思つたのである。七〇歳で隠居生活を過ごして、地位や名譽やお金を得たいというギラギラした欲望はとうに枯れてしまつてゐる。では何の欲かである。

昨年、古希を迎えたのを機会に、七〇の手習いを始めた。囲碁教室に週一回通い始めた。囲碁教室の人達はお金を払つて教室に通つてくるのだから、囲碁は趣味で、人生の気晴らしや暇つぶしで、時間をこれに費やしているだけではないような気がする。少なくとも有段者の人達の取り組み姿勢は熱心で、実によく勉強している。その雰囲気に引っ張られて、私も熱心に囲碁に取り組みだした。

囲碁教室では自分の実力が査定され、持点を与えられ、毎回勝てばプラス一点、負ければマイナス一点となる。従つて毎回昇降段勝負をしているようなものである。点数を別にしても囲碁ほど負けると悔しいものも、ちょいとない。何故囲碁に負けると、かくも悔しいのかと考えたことがある。それは囲碁の思考が人間の人格形成のそれと共通するものが多いため、人間の脳が人格そのものと判断してしまうので、負けると自分の自尊心（プライド）がいたく傷つけられてしまうからと私は思つている。

特に点数が何点になつたとか、勝率がいくらだということに一喜一憂するようになると、人間よけいに悔しくなるものである。囲碁は勝ち負けが余りにも人の心に影響を及ぼす世界であると思う。囲碁を打つていて、勝敗が心をよぎると、その局面で一番よい手を打てず、自分の弱さが出てしまう手を打つて、負けてしまうことがよくある。また連勝している時は自分が強いと錯覚して、無理な手を打つて負けてしまうことがある。ご老師の禅講の『坐禅用心記』に出てきた「驕慢・我慢・

法慢』が生じたための敗戦である。これらは勝ちたいという欲のなせるワザである。女子プロゴルファーの宮里藍選手はよく大きな試合の前に、試合を楽しみたいと言つてゐるのは、結果を気にし過ぎると良くないと考え、楽しむと言つてゐるというのが、最近分かつてきた。

今回一夜接心に参加するにあたり、『坐禅用心記』にある「誓つて煩惱を断じ、誓つて菩提を証せんと念わば、只管打坐して一切不為なる、これ坐禅の要術なり」によつて坐禅し、少しでも欲を心から削ぎ落としたいと思い、一夜接心に臨んだ。ただ今回の一夜接心だけでこの欲がなくなるとも思つていらない。

良寛さんことを書いた『良寛禪師奇話』には、良寛さんは囲碁に勝つと喜び、負けると不機嫌になると書かれています。江戸時代の川柳に「碁ではまだ聖（ひじり）も欲を放れかね」という句がありますが、修行一筋の名僧にしてこれですから、私ごときは今回の一夜接心でこの欲を削ぎ落とせるとは思つてしまふことがよくある。また連勝している時は自分が強いと錯覚して、無理な手を打つて結果として良い碁が打てたらと思う今日この頃です。

〈座談会〉

『明珠』がもたらしたもの、もたらすもの

『明珠』が昭和六〇年四月八日に発行されてから今回で六〇号になります。この間『明珠』の編集班は四代にわたります。それぞれの編集担当者は、どのような想いで編集にあたられていたのか、また『明珠』のかかえている問題点、さらには今後の『明珠』の在り方などについて、どのように考えておられるのかをお聞きするために、歴代編集担当者による座談会を行いました。

参加者は創刊号から一四号まで担当された小畠節朗さん、一五号から二四号まで担当された杉浦上太郎さん、二五号から四二号まで担当された武田博志さん、二五号から三六号まで担当された牧野洋子さん、四三号から六〇号まで担当された添田昌弘さんと松井隆さんと五十嵐嗣郎の七名です（ご老師が終盤に参加されました）。司会は添田さんにお願い致しました。

司会

『明珠』は今回の発行で六〇号となります。六〇号まで続いたのは一つには編集に携われた方々の努力のお蔭だと思います。今日は『明珠』の歴代の編集委員にお集まりいただき、これまでの編集作業を振り返ってのご苦労や、印象に残つてのことなどからお話しを伺いたいと思います。さらに、今後の『明珠』の果たすべき役割やそのための在り方などについても大いに語つていただこうと思っています。

それでは一号から一四号まで担当された小畠さんは、まず『明珠』の発行のいきさつなどからお話し下さるようお願い致します。

ゼロからのスタート

小畠

『明珠』が創刊されたいきさつですが、昭和五七年に本堂が新たに出来て参禪者が多くなり、ご老師から会報誌的なものを創つては如何かと、ご提案がありましたので、「それでは」と、私と高野さんで始めたのが最初のいきさつです。

苦労したことですが、まず高野さんと編集作業を行う場所のことです。図書館でやるわけにはいかないし、喫茶店でやるわけにもいかないし、仕方がないから高野さんのお宅を

お借りして行いました。

また印刷費ですが、当時は参禪会に志納金箱が無かつたので、全くゼロなんです。お金が全くないんです。ですから編集者と当時の代表幹事だった高間さんなどが、ポケットマネーで負担して頂いたわけです。岡田印刷も何回かに分けて支払ったこともあります。そのように細々と始めたわけです。

司会

例えば森岡さんの場合は原稿用紙に一枚位しか書いてこないので、その後は色々お話を伺つて加筆しました。森岡さんの刀についての連載ですが、参禪会の終わつた後、二人でいつも柏駅の前にあつた蕎麦屋の「竹藪」に寄つて、軽く飲んでから帰つたのですが、

その時に刀について色々とお伺いしていまして、「じゃ、森岡さん刀について何か書いて下さい」と頼んだのがきっかけです。

また「従容録に学ぶ」は、私が札幌にいた時、中央寺で福井天章老師の『従容録』のご提唱を聴いていましたので、ご老師に是非曹洞宗伝統の『従容録』のご提唱を寄稿下さるようお願いしたわけです。

司会 どのような記事が印象に残つていますか。

小畠 思い出に残る記事としては、第八号の大雄山の余語翠巖老師のご提唱ですね。当時

坐禅堂がなかつたものですから、坐禅堂のあるお寺で一泊参禅をしていました。最初は沼田の迦葉山で二度行いましたので、次はご老

から、是非、余語翠巖老師のお話をお聴きできるようになると、「老師にお願いしたのです。

それで余語翠巖老師が大智禪師の頌古を引かれてご提唱をされたのです。それを私がテープ起こしをしましたが、今から思えば誤字脱字が多く大変恥ずかし限りです。テープ起こしは如何に大変かがわかりました。

その後、鹿沼にある常真寺さんで一泊参禅

が二回ありましたが、最初の時に常真寺の皆年番幹事をやつた勢いで引き受けました。

高野さんは降りられるので、私は小畠さん



『明珠』創刊号

川広義老師から「釈尊の悲と智と慈」をテーマとしたご法話をいただきました。それを高野さんがテープ起こしをし、「教主釈尊」として冊子に纏められ、一二号の附録として出しました。これは高野さんの大変な労作です。ともかくこれは初期『明珠』のエポックメー キングな記事だと思います。

『明珠』は自分史でもある

司会 それでは一五号から担当された杉浦さんお願いします。

杉浦 一五号から二四号までまる五年間担当しました。私が編集委員を担当するようになつた経緯ですが、その前年の平成三年に年番幹事を今泉さんと担当しており、その年に参禅会二〇周年記念行事として、「禪を聞く会」と第一回在家得度式がありました。それまではどちらかといえばお客様側の立場で参禅会に来ていましたが、この時を契機に主催者側の立場で何とかやれることはやろうと思うようになりました。その時高野さんと小畠さんから「どなたか『明珠』を編集される方はいませんか」というご発言がありましたので、

二号が発行されたこの年は、地下鉄サリン事件と阪神・淡路大震災がありました。当時今泉さんは神戸に住んでおられたので、今泉さんがボランティアとして活動された記事や、ご老師のご子息が神戸でボランティア活動された体験記事がありますが、これは貴重な記事です。また野田の青木さんが、被災者

のアシスタントとしてお引き受けしたのですが、小畠さんから「思い切り杉浦さんのお好きなようにやつてください」と言われ、一人で編集委員をやることになりました。

思い出に残る記事は二〇号ですね。表紙を初めてカラー版にしたことです。野田から来られていた会員の青木志郎画伯から寄贈された絵を、発刊一〇周年記念号の表紙にしたものです。表一と表四がカラーとなっています。また六・七頁には「会員の心で綴る『明珠』六話」と題して、『明珠』の名称の由来や発行日の由来、それに私がそれまでに傑作だと思った経緯ですが、その前年の平成三年に年番幹事を今泉さんと担当しており、その年に参

救済のための個展を開いて、その売り上げを義捐金として贈られた記事なども印象に残っています。

二四号は中国旅行特集です。費用を勘案しながら表一と表四及びセンターの写真集をカラーにしました。

私が『明珠』の恩恵として感じていることは、ふだん日記を付けていないものですから『明珠』が自分史の一部になつていることです。自分が書いているところを見ると、「あの時はこんなことを考えていたんだ、こんなことをしていたんだ」ということがわかるのです。他記事からも類推できます。会報が自分史になつてているのです。しみじみ有難いなと思います。

「従容録を学ぶ」を身近に

司会 それでは次に二五号から担当された武田さん・牧野さんのお話を伺いたいと思います。

牧野 私はまだ新参者でしたが、杉浦さんから「行と心得よ」と言われ、お手伝いならやりますと引き受けました。

武田 前任者の杉浦さんから『明珠』編集を依頼された時、割とすぐにOKの返事をしま

した。実は、杉浦さんは同じ年に入会した数ヶ月先輩です。それで「ハハーツ」と命を受けるような気持ちで引き受けました。ところ

が、最初の二五号は参禪会発足二十五周年記念の大好きなイベントがあつて、その特集記事を載せるという事でとても苦労し、一番忘れられない大仕事になりました。

牧野 杉浦さんはどうして武田さんを後任に選ばれたのですか。

杉浦 印刷会社に勤められていたことかな。卓抜した編集能力がおありと思ったからです。それと牧野さんは僕万智みたいな印象をもつていて、才能があるなと思いました。

武田 編集を牧野さんと共に引き受けましたが、できないこともありましたので、いろんな方に手伝つてもらいました。杉浦さんには年表や仏蹟参拝旅行の記録を何度もつくつてもらいました。

小畠 二七号の政安さんの「ご挨拶」は変わつてゐるね。当然生前に書かれたのでしょうか。

武田 それはね、政安さんからのお手紙の一部が茶話会の時にご披露されたのです。参禅会員に向けての「挨拶」であり、政安さんがご自身の最期のことまでしつかり考えて生きていらしたことを、その時来られなかつた会

員にもお知らせしたかったです。

小畠 政安さんは「達摩はなぜ東土へ行つたのか」という記事を『明珠』に載せておられました。

武田 二番目にすぐ思い浮かぶのは、三一号で「坐禪の手引き」を作ったことです。新しい方が来られるたびに、先輩たちが一から説明していくは時間が足りないので、流れが分かるものを作ろうと思つたのです。一頁に収め、予習・復習ができるよう拡大コピーして、玄関前の棚に置きました。

三つ目は四〇号の「対談『従容録』に学ぶ」が挙げられます。ご老師と漢籍に詳しい小畠さんの対談という形を取つて、『従容録』を説明しようと企画したもののです。『明珠』の第一頁は難しいと読まない方もいます。『従容録』とはどういうものかを、じっくり説明したいというのが企画意図です。実は三〇号に小畠さんが書かれた「『従容録に学ぶ』味読のおすすめ」を読み非常に感動し、「味読をしなくてはいけないんだ」と思つたのです。そこでこの記事を読んでから、小畠さんとご老師との対談を通して『従容録』の構成や内容的なものを解き明かしたいという思いをズーッと持ち続けていました。この対談記事によつて少



歴代の『明珠』編集委員

が、纏めれば面白いものになるなと思つていました。ただ私がインタビューするより牧野さんがズバッと疑問をぶつける方が面白いと思つたので、牧野さんにインタビューをお願いしました。

武田 杉浦さん、三〇号の「龍泉院参禪会の歩み」はパソコンで作ったのですか。

杉浦 これはスクリーンショットなどの用具を使用して、版下を作成したものです。まだパソコンでは作つていません。

武田 私も編集を引き継いでから、似たようなやり方でした。貢ごとの割り付け表を作り、写真にトレーシングペーパーを被せて寸法出しをしていました。ウインドウズ95が出たのが平成七年なのです。ワープロ機能はあるけれど、パソコンが普及し始めた頃で、プロ用の編集ソフトはとても高価でした。

デジタル編集で効率化を図る

司会 それでは次の代に変わつて五十嵐さんからお願ひします。

五十嵐 私は中国江西省の旅行を特集した四一号から、武田さんと今泉房子さんのお手伝いをすることになりました。四一・四二号を

武田 三三号の歩き遍路についてです。安本さんの話は茶話会の時にチラツと聞くのです

が、作業を今泉さんのお稽古部屋で行うのです。女性の部屋でしかも二晩も徹夜して行うものですから、私としては如何なものかと思ひました。また文章を変えたり写真の位置を変えると、文字数を数えて配置し直すので大変面倒なのです。レイアウトを少し変えるだけで修正作業がすぐ一時間や二時間は掛つてしまふのです。

私は旧来の編集作業のように二晩も徹夜をするのはとてもかなわないので、岡田印刷と打ち合わせを重ね、ワードによる編集作業に切り替えました。さらに添田さんと松井さんに声をかけ編集委員に加わつてもらい、四三号からパソコンによる編集作業が稼働いたしました。パソコンで編集を始めると、皆さんからメールで送られて来た原稿をワードに流し込むだけなので、入力の手間がいらず、サクサクと編集作業が進むようになりました。

また私が編集に携わつてから変更したのが段組です。それまでは四段組みでしたが、文字が小さいので読みづらいのではないか、これからは会員の高齢化も進むので、文字を大きくして読みやすくした方が良いのではないかと思いました。そこで編集委員会に諮り、ご老師とも相談して、四四号から文字のボイン

トを上げ三段組みにしました。

また特集号は四六号が初めてです。参禅会三五周年記念として、金沢の大乗寺の東隆眞老師をお尋ねして、ご老師から東老師の禪風についてお訊ねすることになりました。ご老師と東老師との問答は、添田さんにテープ起こしをお願いしました。また金沢から京都に足を延ばして、道元禪師ゆかりの地などを巡りましたが、その記録は武田さんにお願いしました。

四六号編集にあたって、表一と表四及びセンターの写真集をカラーとし、特集号らしさを出すために、表紙は紙を厚くし、始めて表紙の写真を縁なしとしました。表紙は松井さんが撮られた大乗寺の外單の写真としましたが、少しピントが甘く引き伸ばすとそれだけボケてくるのですが、逆に『明珠』の白文字を引き立たせることになり、皆さんからなかなか良い味を出していると好評でした。それ以降、特別号の表紙はこのスタイルを踏襲することになりました。

五〇号では佐々木宏幹先生から、特別寄稿として「坐禅の力」を掲載しましたが、大変反響が大きな記事でした。

それから最近出した坐禅堂建立特集の五九

号ですね。表紙の写真を撮るタイミングと印刷入稿の締め切りが微妙な情況でした。それは坐禅堂の額が掛るのを待つて写真を撮ろうとしたのですが、なかなか額が出来てこないのです。印刷会社への入稿間際になつてようやく額が掛りましたので、すぐ三町さんにお願いして写真を撮つてもらいました。三町さんは迫力のある坐禅堂を撮ろうと魚眼レンズを使われたのですが、そのため少し画像が歪んでしまいました。三町さんには申し訳なかつたのですが、撮り直しをお願いして、再度撮つてもらつたのが今回の表紙の写真です。

三町さんには大変ご足労をお掛けしました。五九号は五五〇部刷つたのですが、合冊用に保存していた一〇〇部も先日自由参禅に来られた方々に配布しましたので、小畑さんとも相談の上、もう三〇〇部増刷することになりました。

牧野 これほど多くの部数を参禅会員以外にはどうに送つているのでしょうか。

小畑 参禅会員の内、現在一年間来ている人の内で「送つてくれるな」と言われた人以外は送っています。ただし一回しか来なかつた人は除いています。また高野さんのように、病気などで一年間来られなくても、以前は来

られていた人には送っています。また今回は工匠堂さんなど工事関係者の方にも送りました。また坐禅堂開基式に出席した人や、ご寄付をいただいた人にお送りいたしました。

仏教的視点に心がける

司会 では次に、これまでの『明珠』の編集作業を通じて、今後の編集方針や編集作業について留意すべき点がありましたらお知らせください。

五十嵐 私はこれまで『明珠』の編集方針は、集まつた原稿はどのような原稿でも全て掲載するものと思っていました。ところが最近ご老師から、信仰に関係ない原稿は『明珠』にふさわしくないと、頁数の多い原稿には費用負担をしてもらう方が良いと言わされたのです。ご老師のご指示を今後の『明珠』にどのように反映していくべきか、皆さんのご意見を伺いたいと思います。

小畑 皆さんから折角頂いた原稿を「これでは困ります」とは、なかなか言い辛いですね。

松井 これは宗教とは関係ない文章ですとパシツと言えるかどうか。

杉浦 趣味的なことだけでは困るけど、でも予め言つとかないと断れないですね。字数も

予め何字以内という縛り方もありますね。

牧野

テーマを宗教的なことに絞ると、三町さんの写真のシリーズや森岡さんの刀のシリーズなどは、今後受け付けないことになるのでしょうか。

小畠

三町さんの「写真とこころ」のシリーズは、最後の纏めが大変良かつたと思います。道元禅師の教えや、二一世紀における心の在り方や自然との対し方などに触れておられたけれど、全くその通りだと思います。また、森岡さんの「作刀と坐禅」シリーズを掲載していた時は、全く原稿が集まらない時期だったので、「こういう事で原稿を書いて下さいよ」とお願いしたわけですから、致し方ないと思います。原稿を集めるのが大変なことだったのですから。

松井 参禅会員は色々な趣味を持つた人が多くいるから、今後増えるのではないかと、ご存じですか。

小畠 始めの頃は八頁を埋めるための原稿を集めのに大変苦労しました。

牧野 「『明珠』に好きなことを書いて送つて下さい」と言つても、誰も送つてはくれません。その点、三町さんや清水さんは自発的に

原稿を送つて下さるので、大変有難いと思いません。まじめな原稿の他に、参禅会員が実生活の中でどんなことをしているのかを知るのも興味深いです。

武田

参禅会に来られる方は内省的な方が多く、しかも向上心のある人達だと思います。

坐禅や禅講を通して生活の中に禅が根付いていけば、その人が関心を持ったことは、仏教的視点、禅的観点から見えてきたものなので、禅的に解釈したものといえるのではないでしょか。ですから、自身の興味の対象が写真や旅行、さらに仕事でさえ、仏教的視点から外れてなければ、それは原稿として拒否できないと思います。

小畠 文章化することによって自分の置かれている立場・身心がどのようなものであるかを確認できるので、『明珠』は自分を確認する場にもなりますね。

杉浦 ご老師はもともと心の広い人ですよ。以前、このような原稿は如何なものかと思われたものも、そのまま載せましたから。

小畠 これまで一番過激な文章は一四号の加藤健之さんの「莫蹉過」です。これも一切修正しないで載せていました。高野さんはこの原稿を掲載することに反対されたのですが、載

せないわけにはいかないとして掲載しました。司会 禅は生活の一部ですから幅広いのはいいのではないかと思います。ただ文章が長すぎるのは問題だと思うので、一回あたりの原稿の長さを制限するのでよいのではないでしょうか。

五十嵐 そうすると一回あたりの原稿の長さはどのくらいに抑えればよいでしょうか。一頁が一五〇〇文字ですから、写真も含めて一五〇〇字以内でどうでしょうか。

会員情報を編集部へ

司会 それでいきましょう。次に『明珠』についていくつかお聞きしたいことがあります。まず投稿者の件ですが、片寄りはないでしょか、より多くの方に投稿してもらうための方策などについては如何でしょうか。

五十嵐 毎回二・三の人は投稿してくださいますが、他の方はこちらから依頼しなければ寄稿してくれません。自発的な投稿を期待したいのですが、ただ趣味的なものばかり集まつても仕方がないのですが。

松井 文章を書くのが下手だからなるべくなれば書きたくない。編集委員に言われると仕方がないから書きますが。

司会 興味のあることならば書けますが。

小畠 参禪会員の方はどのような性質の方

なのか、過去どのようなことをしたのですかと尋問するわけにはいかないのですが、この人に書いてもらおうとするにはどうしたらよいですかね。

武田 茶話会の時の短いお話は参考になりますね。

五十嵐 私は茶話会に加えて新年会の時の各自のスピーチを参考にしています。

牧野 五〇号にある索引で誰がどれだけ書いたかわかるので、文章の書きなれている人とそうでない人がわかりますね。

五十嵐 そうなのです。原稿回数の多い人は限られています。

小畠 牧野さんが東日本大震災に遭われた方の歌を書いて書道展に出された経緯を、書の団体の会報で見ました。一見宗教とは関係ないようだけど非常に良い記事でしたが、あの記事などをもとに牧野さんに原稿を書いてほしかった。

五十嵐 そのように、あの人のことに関してもっと知りたいという声を編集委員に寄せていただぐと、もっと原稿の幅が広がると思います。

司会 そのような情報をもつと編集委員に上げるようにしましょう。では次に会員以外に

有識者から寄稿して頂く点ですが如何でしょうか。仲間内だけでなく外部からの意見も参考になると思います。例えば佐々木宏幹先生の「坐禅の力」は大変有益な原稿でした。

小畠 マンネリを防げるし、変化があるので良いのではないでしようか。原稿料も必要になるから毎回とはいきないけれど、たまにはいいのではないでしようか。

松井 佐々木先生の原稿は大変素晴らしい。坐禅についての先生の見解から勇気をもらうことができ、坐禅を続けて行かなければならぬと思うようになりました。

小畠 佐々木先生は事前に『明珠』を全部読んでおられたことがよくわかります。例えば

小山さんの書かれた記事などを引かれている箇所もありましたから。

五十嵐 佐々木先生の「坐禅の力」が載つている五〇号は、ホームページのヒット数も〇二五回と最も高く、他の号の二倍近くになっています。

松井 活動記録としてもこれほど素晴らしいとは思いません。

司会 次に現在『明珠』が龍泉院のホームページ

に創刊号から全てアップされているのですが、この点について、効果のほどは如何でしょうか。私が所属する俳句の会では、会報誌は印刷しないでネットに上げて、必要な人は自分でプリントアウトしています。

小畠 我々爺いの世代は、やはり印刷物の方がいいですね。

杉浦 ホームページは会員にとって大変良いことだと思います。特に新しい会員さんには、『明珠』のバックナンバーも合冊本も差し上げられないですから、ぜひホームページを活用いただき、お読み頂きたいと思います。
老師 松葉町の坐禅クラブの人からお電話で「毎日暇があればホームページで『明珠』を創刊号から読んでいます」。

全員 ホーツ。

老師 「連載は少なく読みきりですから、いつもでも読めるんです」と、わざわざ言つてこられたんです。有難いことです。たまたま松葉町の坐禅クラブの人ですが、他にも読まれている方は大勢おられると思います。

松井 インターネットで全ての『明珠』を読むことができるなら、合冊本を作成する必要はないと思います。

はないでしょう。

杉浦 自分でプリントアウトしなければならないから、それは現実的ではありません。既に三一号から各号は全て百部保存されているのだから、あとは製本するだけで済みます。

司会 『明珠』を会員以外にも配布していくすが、会員拡大や地域貢献の上から、今後はどういう人たち・グループ・機関に配布を広げていけばよろしいでしょうか。

小畠 両本山に『明珠』を送りましたが、總持寺様からは「お送りください有難うござります」というお手紙を頂きました。他には送つていません。

司会 国会図書館には送つていませんか。

小畠 送つていませんが、合冊本ができた時に送つてはいかがでしょうか。

松井 布教という観点で送らなければならぬいところはどこでしょうか。

司会 柏図書館などはどうですか。

小畠 『明珠』は六〇号も続いているのだから、郷土史的な価値も高いと思います。柏や流山や我孫子や船橋の図書館に合冊本を送りましよう。

五十嵐 麗澤大学などに送るのはどうでしょうか。

小畠 高間さんや高野さんはもともとモラロジーから龍泉院に来たのですから。

五十嵐 では麗澤大学などは受け入れてくれる可能性がありますね。

司会 最後になりますが、『明珠』はマンナリに陥っていないか、何か新しい切り口なり特集記事を考えなくてもよいでしょうか。

武田 『大法輪』でも何年か毎に同じ特集を組みますから、同じテーマや特集を組んでも中身が違うので、良いのではないでしようか。

牧野 参禪会員は『明珠』がどれだけ興味をもつて読まれているのか、編集者としては反応を知りたいですね。

武田 ホームページなら、参禪会員が「ホームページを見ました」という声があると、そこで反応が分かるのですが、そういう風に言つてくれる人がいないと反応が分らない。『明珠』はどれくらい興味をもつて読まれているか分りづらいですね。

司会 結構興味をもつて見てていると思います。年に二三回しか来なかつた軍地さんは、「明珠」を送つてもらつたけど素晴らしいね。よく読ませてもらいました」と言つていました。

牧野 『明珠』が発行された次の参禪会の時

にでも、『明珠』の感想をひと言述べて頂くとうれしいですね。

松井 編集委員をやると、すべての原稿を何回も読むことになるから、年番幹事と同じくなるべく多くの人に経験してほしいね。

老師 来年あたりからそろそろ若い人にバトンタッチして、新しい編集方針で臨まれては如何ですか。

司会 六〇号を出してからそのようにしようと思っています。今日はお忙しどころお集まりください誠に有難うございました。座談会を通じて『明珠』の知られざる歴史や秘話などをお聞きすることができましたし、『明珠』の今後の方向性や在り方などについても示されたのではないかと思います。今後も『明珠』の発展のためにご援助・ご助言を賜りますようお願い申し上げ、座談会の纏めとさせていただきます。



『明珠』編集会議

仏法を論ずる人は多いが、

仏法に生きる人は少ない

我孫子市 清水 秀男

「仏陀の教えは尊いものではあるが、それ自身は何等人を照らすものではない。人格に具現されて初めて人格を指導する光となり、力となるのである」

これは、浄土宗 藤本淨本土上人（山崎弁榮上人の高弟）の教えです。

私はこの言葉を、路上生活者をはじめとした生活困窮者の心に寄添う活動を続けている、「行動する若手仏教者」浄土宗 吉水岳彦師から聞き、全身に痛棒を受けた感がしました。ここで、私なりにこの言葉を味わつてみたいと思います。

私は幸いにも学生時代から遭い難き仏教に接する機縁を得て、椎名老師はじめ良き師と切磋琢磨する良き法友に恵まれ、古希を迎えることが出来ました。

しかし、振り返ってみると、尊い仏陀の教えを知識の上からは学び、不十分ながら理解したつもりかもしませんが、そこに留まり自己満足に陥っているのではないだろうか。仏教を生きた仏法として本当に身心から領解

し、利他の人生を送っているであろうか。「論語読みの論語知らず」に終わっているのではないかだろうか。

念仏の先覚者 高光大船師（浄土真宗大谷派）の仏教者への警句、「仏法を論ずる人は多いが、仏法に生きる人は少ない」の言葉は、まさに私の現状を言い当てており胸をえぐられる感がします。

藤本上人の教えを音楽で例えてみれば、楽譜があり、それがいくら名曲であつたとしても、それを演奏家が実際に演奏しなければ、名曲が生きたものとして具現化されない。演奏家は楽譜に表されている作曲家の真髄に迫ろうと努力し続け、作曲家の真心と一体化（自他一如）した演奏が出来た時、はじめて観客に感動を与えることができ、演奏家自身も成長することができる。

それと同様に仏陀の教えそのものは楽譜に相当し、それ自身では光明を与える力はない。その教えを学び、それに向かつて自分自身で一生行じ続け、深め続けていく。その過程の中で、徐々にその人の人格の中に仏陀の教えが体現化されていき、内から滲み出る人格の輝きが、その人の信の力として人生の光明となつていく。そしてその光明が結果として周

りの人々にいつのまにか影響を与えていく力となつてゆくのではないか。藤本淨本土上人の深い教えを未熟ながら私なりに、以上の様に深い教えを頂いた次第です。古希を期してこの教えを深く胸に刻み、学道・精進いたしたいと覺悟を新たにしています。

最後に、エンゲイジド・ブディーズムを提唱し、世界的に行動する宗教者、ティック・ナット・ハンの次の言葉を味わいながら、筆を擱きたいと思います。

哀れみのある行動をいくら語つたり考えたりしたところで、それを実行に移さなければ、色は美しくても香りのない花と同じです。

合掌

松井の魅力・NYの魅力

白井市 鈴木 民雄

娘からの一本の電話、それは「ヤンキースが七月二八日に松井秀喜の引退式を開催するのよ、お父さん達応援にニューヨークに行くでしょ。一緒に旅行しよう」との誘いでつた。

七月二八日、私達はニューヨークのホテルを八時に出発し、地下鉄を利用して九時前にヤンキースタジアムに到着しました。開門一

一時の二時間前ですが、松井秀喜の引退式セレモニーを見ようと集まつた多くの日本人野球ファンとヤンキースファンが、球場外を何周も埋め尽くしていました。その中には、M A T S U I 55番のユニホームを纏い、また「松井有難う」と印刷した「55」Tシャツを身に付けている人も多く見受けられた。そのような人達の渦の中を日本のメディアがインタビュウに飛びまわり、球場周辺は異様な興奮に包まれていました。

「球場に入った瞬間、泣きそうだった。言葉にならないくらいの感動と、改めて幸せな野球人生だったと思う。生涯忘れない」と松井本人が述べていたが、ヤンキースのユニホームを脱いで三年も過ぎていて、いまだに多くのヤンキースファンに愛されている松井秀喜のすごさを思い知らされた一日だった。私達もヤンキースファンと一緒に感動を味わうことができました。

二〇〇二年、巨人軍が日本一になった後、松井選手は大リーグ挑戦を表明し、二〇〇三年から二〇一〇年の間に七回（途中二〇〇六年に骨折の為に中断したが）、家内と一緒に松井選手を応援の為に訪米しました。

「なぜ何回も、観戦に訪米したの」と聞か

れます、まず米国野球の魅力です。松井選手が出場したプレーOFFの試合を観戦した時、これまでに味わったことのない空気感が、野球場を覆っていたのです。その時私はカルチャーショックを受けました。やっているのは同じ野球ですが、球場の雰囲気、野球のスピード感、応援の仕方が全く日本と違うのです。

その後、全然野球に興味を持つていなかつた家内は、今では大リーグの野球放送があると、朝からテレビを見る程になり、大リーグの日本選手のみならず、他の選手も詳しくなつてしましました。

次にニューヨークの魅力です。東京と同じように世界中の人が集まる魅力ある街なのです。街並みには観光客が溢れています。それを受け止める受け皿も数多く用意されています。スポーツ面、芸術面、観光面において。

今日は円安の為、海外観光客の訪日が多くなっていますが、ニューヨークには参考となる部分が多くあると思います。

今回は七月二十五日から八月一日の帰国まで七泊八日のツアーでしたが、その間、野球観戦は一日だけです。それ以外にはミュージカル「STOMP」をオフ・ブロードウェイで

鑑賞したり、小さなジャズクラブ「SMOK E」でジャズを聴いたり、ロングアイランドワイナリーツアーに参加して、ワインのティード感、応援の仕方が全く日本と違うのです。

ところで米国は市内いたるところに星条旗を掲げています。特に米国は移民の国家です。国民が一つにまとまるためには、国歌、国旗が必要なのですね。また軍人、警官を特に尊敬します。毎回野球場のスクリーンに軍人の姿を映しています。二〇〇三年にニューヨークを訪れた時は、迷彩色姿の軍人が機関銃を掲げて、街中到る処で警戒していた為、反対に街中を安全に過ごせた経験があります。

米国は世界で一番人種差別が残っている国だと思います。奴隸制度の姿が形が違います。が残っていて、それがチップ制度となり今まで続いています。私の偏見でしようか。

それはさて置いて、野球の次は、クリスマス時の冬の街並みやオペラ鑑賞等、まだまだ見るものがあります。それは自分自身の勉学にもなります。早い時期に皆様にニューヨークの魅力を報告したいと思います。

合掌



◇◇会員便り◇◇

●今年五月から自由参禅が始まりました。毎月第二土曜日の午前九時から一時まで坐れます。入退

堂も自由ですので、永く坐りたい人、少しだけ坐りたい人、自分に合わせてお坐りいただけます。

龍泉院参禅会簡介

【参 禅】

一、定例参禅会

- ・日 時 每月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
- ・坐 禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
- ・講 義 （坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）木版三通、開経偈、『正法眼藏』の提唱
- ・座 談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

- ・日 時 每月第二土曜九時から正午まで
- ・坐 禅 九時から一時まで（入退堂自由）
- ・作 務 一時から正午まで坐禅堂掃除
- ※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

〔年間行事〕

- 一、一夜接心 本年は六月八～九日、一泊し七炷の坐禅と提唱等
- 二、成道会 本年は一二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
- 三、他の行事 涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（二月例会後）
- 四、作 務 每月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内外の掃除等

【余報誌】

- 一、「明珠」（四月八日と一〇月五日発行）
- 二、「口宣」（年一回）
- 【ウェブサイト <http://www.ryusenin.org/>】〔明珠〕〔口宣〕のバックナンバーがご覧になれます。

【定例参禅会・年間行事】		沼南雑記	
●三月一七日	（河本 健治氏）	平成二五年	五月一日
●四月八日	（山本 聰氏）	三月一五日	（六名）
●四月二八日	（岡本 匠房氏）	四月五日	（三名）
●五月二六日	（小畑 二郎氏）	五月一日	（五名）
●六月八・九日	（岡本 匠房氏）	五月五日	（七名）
●六月二三日	（逢坂 國一氏）	五月二九日	（四名）
●七月二八日	（杉浦上太郎氏）	六月一日	（四名）
●八月一六日	（五十嵐嗣郎氏）	六月二日	（二名）
施食会		六月七日	（四名）
法話		六月二二日	（二名）
大長院住職		七月五日	（三名）
小早川浩大老師		七月二三日	（二名）
（牧野 洋子氏）		七月二九日	（二名）
（秀嗣）		八月二日	（五名）

▼記念すべき六〇号の編集に携わることができ大変幸せです。これまでの諸先輩方の努力の積み重ねだと感謝申し上げます。創刊号の「沼南雑記」には、古人は「相続は大難」と申していますが、永く相続できるよう努めたいと書かれていました。その言葉通り見事「明珠」は相続されてきました。今後も相続するよう努めますので、ご協力・ご支援のほどよろしくお願い致します。

▼今年の夏は猛暑というより炎暑という感じでしたが、八月末になると微妙に秋の気配が感じられるようになりました。（秀嗣）

龍泉院

參禪會会報

創刊六〇号記念

● ●
印發

行／天德山龍泉院
刷／岡田印刷株式会社

柏市中央1-1-1
千葉県柏市泉2081

0044(71191)
7164(1609)
6166(609)
565(59)

